

徳

日本は徳の国であった。歴代の天皇の御聖徳は申し上げるまでもなく、下、国民もまた何よりも徳を尊び、徳を成就することを喜びとする国民であった。けれども今日果して昔ほど徳が尊ばれているであろうか。

ただに日本のみならず、東洋は聖賢君子を尊び、徳を重んずることが特徴であった。仏教や儒教の流れには、尊い幾多の人格を生み出して来た。けれども今日果して東洋は古の如く徳を尊重して歩んでいるであろうか。

東洋は永遠に東洋でなくてはならない。

日本は永遠に日本でなければならぬ。

即ち徳の成就、建国の大精神に帰り、道義の国日本を建設しなければならぬ。

徳を訓で読めば徳のつとである。徳とは即ち「法のつと」である。天地の間に厳存する法を行えば、やがてそれがその人のものとなって徳となるのである。即ち徳とは、法の如く生きることである。されば、徳の成就は法を聞くことによつてはじまる。

故に、聖賢は必ず学を好む。

現代都会の青年を見て、悲憤慷慨せぬ者があるだらうか。

「人間は一体何をなすべく地上に生れたのか。」

一度位は真剣に考えて見たいものである。安価な流行歌や、映画や、カフェーに浮かれて、可惜青春を費すとは言語道断である。

「学に志せ。汝の一生を尊ぶならば学に志せ。徳は真に学に志すことによつてはじまる。」

ある時、哀公が、孔子聖人に、その弟子中誰が最も学を好むかと問うた。孔子の答はこうである。

「顔回というものあり。学を好む。怒を遷さず、過を貳びせず、不幸短命にして死す。今や則ち亡し。未だ学を好む者を聞かざるなり。」と。

ああ、学を好むとは、孔子にあつては、徳の成就を意味したのであった。

蓮如上人の『実悟記』に曰く

「何よりも親に不幸なる人は、蓮如上人第一御きらひにて候、又は不信の人には、蓮如上人は、御見参あるまじきと明應三四年の比より被仰出されたる事候」と。

蓮師もまた徳を尊びたもう上人であった。

徳！徳！徳！

はつきり魂に言つて聞かせるがよい。

「汝の一生は、ただ徳を成就することによつてのみ意味がある」のだと。

我をして徳を成就せしめたまえ。我が友よ、善知識よ、我を叱るもよし、罵るもよし、打つもよし。しぶとい魂である。たとえ一時は怒るとも、悪むとも、我をして徳を成就すために、忠言、悪言、罵倒を与えたまえ。

「願誓申されしと云々、常には我が前にては言はずして後言いうとて腹立する事なり。我はさようには存ぜず候。我が前にて申しにくくば、陰にてなりとも我が悪きことを申されよ。聞きて心中を直すべき由申され候。」
この願誓の尊くも純なる心は、そのまま蓮如上人のみ教を頂戴して生きる相である。

「たとひなき事なりとも、人申し候はゞ当座領掌すべし。当座に詞を返せば再び言はざるなり。人のいう事をばたゞ深く用心すべきなり、是に付いて或人『相互に悪しきことを申すべし』と契約候ひしところに、すなはち一人の悪しき様なること申しければ『我は左様には存ぜざれども、人の申す間左様に候』と申す。さればこの返答あしきとのことに候、さなきことなりとも当座は『さぞ』と申すべきことなり。」(蓮師御一代聞書)

誠に至れりつくせりの御意見である。悪事があつても無いと言いはり、人の前だけ通れたらと思う心は、凡そあさましい極みである。

『菜根譚』に云く

「寧ろ小人所忌毀 母為小人所媚悅 寧為君子所責修 母為君子所包容」
読み方

「寧ろ小人に忌毀せらるゝも、小人に媚悦せらるること母なかれ。寧ろ君子に責修せらるるも君子に包容せらるること母なかれ。」

人格劣等なる小人には、寧ろ忌み嫌われ、悪口憎言されてもいいから、小人に媚びへつらわれて、悦ばれるようになってはならぬ。寧ろ人格徳行の高き君子に責めつけられ修め正されても、君子に、致し方のない奴だ、と憐んで包容せられるようになってはならぬ、と云うのである。誠にうがった至言である。

聖賢は必ず、天の声を聞き、仏の声を聞く。

されば、人あると否とにかかわらず、必ず言行を慎み、戦々競々としておそる。

正法念経に云く

「智者は常に憂を懐いて而も獄中の囚に似たり。愚人は常に歡樂して光音天の如し。」と。

昔支那に楊震と言う徳の高い方があつた。東萊の太守となつて赴任する途中、昌邑と云うところに宿をとつた。昌邑の長官は、かつて楊震によつて挙用せられたことのある我才王密と云う人であつた。その夜、王密は金十斤を懐にして宿を訪ね、その金を賄賂として贈ろうとした。楊震はそれを斥けた。すると彼は「暮夜知る者無し。」とて更に勧めた。楊震曰く「天知り、地知り、我知り、子知る。何ぞ知るもの無しと謂ふや。」と、楊震の四知とて有名な話である。これ東洋君子の信念であつた。しかるに今や贈賄、収賄、疑獄の国、日本を出現してしまつた。

賄賂横行は乱世の象徴である。

「信をとれば自身の膠徳なり。」(御一代聞書)
信心は誠にその人の勝れたる徳である。

「徳が無い」とは人間にとつての致命的な刻印である。しかし我等は果して、深い内省の世界において、自らの徳を発見することが出来ようか。親鸞聖人の悲歎はこゝにあつたのである。

廃悪修善の世界においても、断惑証理の世界においても、大乘の菩薩としての徳を発揮せんとすればするだけ、そこに見えて来るものはただ罪惡煩惱の動きにすぎない。徳の一字は遠く遠く去つてしまつた。

しかしその徳の字の行末をつきとめる時、それは彼岸の如来へと遠つて行つた。

「大行というは無碍光如来の名を称するなり。斯の行は、諸の書法を撰し、諸の徳本を具せり、極速円満す。真如一実の功德宝海なり。故に大行と名く。」

徳本………功德宝海………の大文字は、南無阿弥陀仏の内容であつたのだ。その大善大功徳が我らに廻向され、恵まれて救われる。

一度去つてしまつた「徳」の文字が、生々として我に帰るのだ。であるが故に「信をとれば、自身の勝徳なり。」と言われるのである。

廃悪修善の世界から転悪成徳の世界へ。如来の本願自然の大用は「悪を転じて徳を成す」のであつた。展ずと言うは「罪を消し失はずして善になすなり、よろづの水大海に入れば即ち潮となるが如し。」

「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智」(行巻)

徳は、今、如来の名において我に復活するのだ。

如来の至徳は、行者にはたらいで、転悪成徳の大用として活現する。聖人の永遠の微笑がこゝにある。

「言々六字より発すべし。」

一挙手、一投足、大信より生かさるべし。

時を宝玉とするも、泥土とするも、

ただ汝が六字に生きると否とによるものぞかし。

唯南無阿弥陀仏称うべし。」

かゝる世界の風光は、内省自証の至極、無功德底に落在して、端的に、如来の智慧に直参するもののみ信知し得る世界である。

地獄一定底にただ南無阿弥陀仏称うべし。

一介の凡俗、時に大聖を罵ることを得。

不徳下劣いよく、甚しうして、人の善をおとし、人の悪をあばく。およそ徳に遠き人なる哉。されば『菜根譚』に言う。

「受人恩 雖深不報 怨則浅亦報之 聞人惡 雖隱不疑 善則顯亦疑之 此刻極薄之尤也 宜切戒之」

読み方「人の恩を受けては、探しと雖も報ぜず、怨みは則ち浅きもまた之を報ず。人の悪を聞いては、隠ると雖も疑はず。善は則ち顕わるるもまた之を疑う。此れ刻の極、薄の尤たり。宜しく切に之を戒むべし。」

恩を受けること深くとも報ぜず、それに反して怨みはたとえ浅くとも深く復讐をする・・・世には一たんの腹立ちから、その人を殺す者すらある・・・人の悪を聞けば、それが隠れてはつきりしないでも、それを信じて疑はず、善なればそれがはつきり顕われていても、それをなお疑う。これ刻の極、人情にはずれた残刻の極致である。薄の尤、軽薄、浮薄の尤である。誠に小人の常をうがち得て完膚なしである。

横川の源信和尚曰く

「何に況んや、念仏の功積り、運心年深き者は、命終の時に臨まば大喜自ら生ず。」と。(往生要集)

「信心治定の人は、誰によらず、まづみればすなはち、たうとくなり候。是れその人のたうとぎにあらず、仏智を怠らるゝがゆへなれば、いよく、仏智のありがたきほどを存すべきことなりと云々。」(聞書)

内に燃ゆるものは外に輝く。

信は如来の徳の自然の輝きである。